

元デビルハンターの魔法少女録

ヒロケン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは元デビルハンターのレオンが転生者を時に見守り排除しながら余生を過ごす物語です。

目次

第3話	第2話	第1話
16	7	1

第1話

どうもはじめまして俺の名前は————だ、あれ？なんで名前が分からないんだ？まあいいか、それで今俺は真つ白の世界にいる、なんで居るのは全く分からない、それで辺りを見渡したりしても何も無い、それですることがないので俺は夢だなど思い再び寝ようとした「寝ないで下さい!!」おっと誰かが呼んだみたいなので声の方に向いてみたら金髪ロングの綺麗な人がたっていた。

「そんな、綺麗だなんて／＼／＼／＼」

「あれ？今の声に出ていた？」

「いえ、私は神なので思考を読んだけです。」

え？この人、神なの？言われてみれば神々しいしこの世の者とは思えない美人だし、納得するしかないか。

「それでその神様が俺に何のようですか？」

「はい、それはあなたが死んでしまったのでそれであなたには転生して欲しいんです。」

「ちよつと待ってください、何で俺は死んだのですか？」

「そうですね、あなたの死因は老衰ですね。」

「そうですか、それと何で俺の名前が思い出せないんだ?」

「それについては不明です、ですが今から思い出させます。」

そういつて俺の頭に触れられると俺の名前と他の事も思い出した。

「……………俺の名前はレオン、元デビルハンター。」

「よかった、思い出した見たいですね。」

「ああ、ありがとうございます、それで何で転生させるんですか?」

「はい、実は最近私以外にも神はいるのですが何人かの神が失敗してしまい何人か死んでしまつてその内の何人ががらくでもない奴等でその監視もしくは排除をお願いしたいのです。」

「排除つて……………物騒ですね。」

「但し相手が改心したのなら問題ないですけどどれだけやっても無理なら排除つて流れになりますね、それでは早速特典を選んで頂きます。」

「それはいいですけどどこに送られるのですか?」

「そういえば言つてなかつたですね、それは「魔法少女リリカルなのは」というアニメにです。」

「なんだそれは? アニメは知ってるが「魔法少女リリカルなのは」とはなんだ?」

「それならここにアニメが全部ありますので見ますか?」

「そうだな、見させて貰うよ。」

神様と俺はアニメを全部見させてもらった。

「分かりましたか？」

「ああ、分かったよ、それで特典って言うのは？」

「はい、それはあなたの力に加えて新たに8つ他の力を与えるということです。」

「そうですか、つと言われましても望むもの思い付かないですね。」

「そうですか……。」

「なら、便利な能力をルーレット見たいにして回して俺がそれにダーツを投げるので当たった奴にしようと思います。」

「そうですか、それなら作りますのでお待ち下さい。」

神様がそういうと少し離れた所にルーレットが現れて俺の手元に8本のダーツが現

れた。

「それではやってくれますか？」

「分かった。」

俺は一本目を投げたら見事に当たった。

「まずは……………凄いですね、超当たりですよ、それはステータス変更ですよ。」

「ステータス変更？ どういう効果だ？」

「その名の通りあなたの身体能力とかを数値化してそれを自由自在に変更することが出来るんですよ、身体能力以外にも運とか身長から体重まで何でも変更出来るんですよ。」

「それは凄いな、それじゃ次は……………ほい。」

「次は……………これまた使いこなせばとても強力な奴でfortissimo/Akkord:Bussvierの全員の戦略破壊魔術兵器（マホウ）全てですよ。」

「どういう作品だ？」

「それはですね……………」

詳しくはfortissimo/Akkord:Bussvierを調べて下さい。

そして俺は三本目を投げた。

「これはまた……………場合によっては最強ですね……………。次はアスラ・クラインというアニ

メに出て来るアスラ・マキーナ全てですよ、代償なしの。」

これまたアスラ・クラインを調べて下さい。

四本目はキングダムハーツの能力全て

五本目はフェアリーテイルのドラゴンスレイヤーの全属性

六本目はありふれた職業で世界最強の神代魔法の七つ

七本目はレアスキル創造

八本目は使いきれない程のお金

「……………強すぎませんか？ただでさえ俺だけの能力でもチート級なのに。」

「そうですね……………そういえばこれとは別に渡して置くものがありますよ。」

「何ですか？」

「それはかつてあなたが共に戦ったダンテとバージルとネロからの贈り物ですよ。」

そういつて出て来たのはかつて共に戦い協力してきた三人の魔具のに闇魔刀（YAMATO）と魔剣ダンテとその他諸々の物にダンテが愛用していた二丁銃のエボニー&アイボリーがあった。

「……………そうか、ありがとな皆、大事に使わせてもらおうわ。」

「それでは送りますね。」

「ああ、よろしく頼みます。
そして俺は転生した。」

第2話

どうも転生したレオンだ、俺は今何処かの庭にいる、なんでここにいるんだ？と思っ
ていたら猫耳に尻尾を着けた女性と金髪ロングのツインテールにしている女の子にオ
レンジ色の女の子がたっている。

「あの、あなたは誰ですか？」

猫耳の女性が話しかけてきたので。

「どうも迷子の……………」
「？」

どうしよう、本名を言えいいのか？けどおそらくこつちでの名前も分からないな
…………レオンの方がいいのか？

そんなことを考えていたら俺を転生させた神様の声が聞こえてきた。

『どうも神です、すいません貴方に送る予定の場所が変わってしまい申し訳ありません、
それでは手短かに教えますね、まず貴方の此方での名前は黒崎凜音―クロサキリオン―で
す、それに貴方の今の見た目は20前後にしています、それと貴方の住所は――県海
鳴市――長――ですので頑張ってください。それでは。』

と一方的に言われて声が聞こえなくなった、それに疑問を持った女性は疑いながら俺を見ています。

「それで名前はレオンと所謂何でも屋をやっている。」

「何でも屋ですか、それで貴方は何でここにいるのですか？」

「何でかは多分俺のレアスキルが失敗しちやってここに来たみたいなんだ。」

俺は咄嗟に神代魔法の1つの空間魔法を思いつき嘘を着いた。

そしてそれを信じたのか疑うような顔を晴らした。

「そうなんですか……………それで貴方は元の世界に帰れるんですか？」

「帰れますよ、ちなみに何か困っている事とかがありますか？何なら報酬次第ではあらゆることは出来たりしますよ。」

「そうですね……………ちなみに不治の病とかも……………いえ何でもないです。」

「……………ちなみに不治の病でもお金さえもらえれば治せますよ。」

「「え!」」

確かに俺は芳乃零二の力のダ・カーポゼロを使えば病気になる前に戻すことも出来るからな。

「それならお金は払いますのでどうかプレシアを助けて下さい!!」

猫耳の女性が頭を下げて来たので俺は。

「構いませんよ、それではそのプレシアという方の所に案内して下さい。」
「分かりました、着いてきて下さい。」

そして俺は猫耳の女性に着いていった。

どうもリニスです、私は今フェイトとアルフと一緒にレオンという男性をプレシアの所につれていきます、その理由はプレシアの病気を治せると言うのでつれていきます、最初は胡散臭い方だなと思いましたが彼の目を見てみると安心出来る感じがしたので信用したのです。

そうこう連れているとプレシアのいる研究室につき中に入ると中の机の所でだらしなく寝ている。

しかも寝言で、「フェイト…もうすぐお姉ちゃんに会えるからね…」と言っている。お姉ちゃんとはアリシアでプレシアの娘でフェイトのオリジナルです、それでフェイトはアリシアのクローンとして産み出されたのです。

何でクローンを作ったのかはアリシアが妹が欲しいと言っていたのですがプレシアは既に離婚していて妹を産めない、けどその時にクローン計画を知ってそれを取り組んだのですが、やっている途中で事故が起きてアリシアは死んでしまい悲しみに明け暮れたけど、それならクローン計画でアリシアを蘇らせようとしたけど生まれたのは性格が全く違うフェイトなのです、それに絶望して暫くは部屋に閉じ籠ったけどフェイトが懸命に励まして立ち直り今度は別の方法でアリシアを蘇らせようと決意して私をフェイトの教育してたまにプレシア自身が教えたりしてフェイトに姉のアリシアを会わせてあげようと頑張っているが、その無理が祟って病気になるし今なお死に近づいているので

何とかしたいと思っっているがプレシアの病気は治りませんでした。が此の方なら救えるかも知れないと思っっています。

「プレシア、起きて下さい、此のままでは風邪になってしまいます。」

「……………んう〜ん、あら、リニス、おはよう、あら私ったらここで寝てしまったのね、所でその貴方は誰かしら？」

「此の方はレオンと言って偶々ここに迷い混んだ見たいで、それで彼はプレシア、貴方の病気を治せるらしいのよ。」

「!?それは本当なの!？」

「はい、確かに俺のレアスキルを使えば可能ですよ。」

「そう、それならやってくれるかしら？」

「分かりました、それでは戻しますよ、ダ・カーポゼロ。」

俺は魔法を使うとプレシアの足元に魔方阵がかんで暫くしたらプレシアは若くなっっていた。

「これは、凄いわね、体も大分楽になっただわ、それに若返っっているわ。」

「この魔法は選んだ対象を過去の状態に復元する魔法だから病気になる前に戻しました、これで大丈夫ですよ。」

「な!?!そんな魔法があるのね……………もしかしてそれを使えば死人を元の姿に戻す事も可

能なのかしら?」

「……………確かにそういった事も可能ですよ。」

「だったら!私の娘のアリシアを生き返らせてほしいのよ。」

「わかりました、それではそのアリシアの所に案内してください。」

彼がそういってプレシアが案内して行った。

俺は今沢山カプセルがある部屋に案内された。

そしてその中心に金髪少女の入ったカプセルがある。

「この子がアリシアよ。」

「そうですか、それならカプセルからだして服を着させてあげてください、そのままでは恥ずかしいだろうし。」

「分かったわ。」

俺は部屋を出る時に近くに透明のアリシアがいて目線があうと俺が頷くとアリシアは嬉しそうになっていて部屋を出た。

そして待つている間に俺はダ・カーポゼロではなくて神代魔法の魂魄魔法でも蘇生可能になるかも知れないと待つていると呼ばれたので俺が入るとアリシアは服を着た状態で寝ていてその近くにアリシアの霊体があったので。

「それじゃこれから蘇生させますのでお待ち下さい。」

俺がそういうとアリシアは離れていったので、俺は魂魄魔法を使いアリシアの霊体を体に入れて再生魔法をかけると見事蘇生できた。

「……………んう~~~~ん。」

「アリシア!!!」

アリシアは泣きながらアリシアに抱きついた。

「あ、お母さん、苦しい……………」

「プレシアさん、そろそろ放してあげたらどうですか？」

「あ、そうね、ごめんねアリシア。」

「ううん、お母さんにまた話せて嬉しいよ。」

そして次はアリシアがプレシアに抱き付いた、そして今度は優しくプレシアも抱き返した。

暫くしてアリシアとプレシアの感動の再会の後フェイトとアルフとリニスに報告して見事家族全員幸せになった。

「それではそろそろ帰りますね。」

「今回は本当にありがとうがとうね、おかげでまたアリシアと話せるわ。」

「いえ、お気になさらずに、それでは。」

俺が帰ろうとするとフェイトが俺の服の掴んできた。

「あの……………また……………会えます……………か？」

涙目で頬を赤くして上目遣いで言ってきた。

「あ、ああ、生きてる限りいつかまた会えるよ。」

俺の笑顔でそういうとフェイトは顔を真っ赤にして俯きリニスも頬を赤くしてぶつぶつ言い出すしプレシアは鋭い眼光で見てるしアリシアはニコニコしながらみてアルフは皆をみてきよんとしている。

そして皆に見送られて海鳴市の自宅に転移させてもらった。

第3話

テスタロツサ家から転移して来たのは海鳴市の俺の家に来た。見てみると三階建てで大きな庭もあり一人で住むにはでかすぎる程である。

それで中に入ってみると靴は玄関に置いて素足で入る奴で脱いで入ると長い廊下に二階に上がる階段にエレベーターまであるぞ、何で一般の一軒家にエレベーターなんてあるんだ……、それでエレベーターの階数表示を見ると上は四階まであり下は五階まである。

とりあえずは一階を見てみるとリビングと台所が一緒になっている部屋と風呂と更衣室と和室がある。それとリビングの机の上に通帳と住民票とか大事な物が置いてある、それに通帳の中身を見てみるとなんと単位が京まであるぞ。

それと台所の家電品は最新の物ばかりだ。それに風呂も一人で入るにはとんでもなく大きい。

それで次に二階には空き部屋がいくつもあっただけ。三階はベランダにこれまた空き部屋ある。四階は屋上で何も無い。

地下はまた後日にして時間も夕方なので夕食にしようと思ひ台所の冷蔵庫を見ると

食材は何も無かったので俺は通帳を持って買い物に出た。

買い物物を済ませて家に帰って夕食を食べ終わり俺は暇になり地下に行く事にした。

それで地下一階にはトレーニング室といくつかの空き部屋に簡易シャワー室があった。

地下二階には特殊トレーニング室になっていてここには重力室があり最大で重力を100倍まで上げられるらしい。

地下三階と四階は空き部屋しかなく地下五階には大量の車にバイクが置いてあった。

そして俺は探索を終わらせて今日は寝た。

翌日俺は家の探索も終わったので早速地下のトレーニング室に来てまずはキングダムハーツのキーブレードの特訓に入った。

ちなみにキーブレードはその作品の全てを持っており魔法も全て扱えるらしい、アビリティというもので全て使える。

それでまずはキングダムチェーンで色々やっていくとしよう。

半日ほど練習すると慣れていきいまでは全てのフォームチェンジを可能とした。

そして時間が昼になったので俺は買い物に出かけた。

買い物が終わらせて帰る途中公園に着くと何やら落ち込んでいる少女がいる。多分だけどあれってこの物語の主人公の高町なのではないか？

俺としては原作に関係する人とはあまり関わりたくないな、けど放っておけない、だから俺はこの大人の姿のまま声をかけた。

どうも高町なのはなの、私は今公園で一人で居ます、なんで公園に居るのかは家族に迷惑をかけない為に居るからです。

けど公園に来て遊ぶ相手がいません、けど今帰ったら家族に迷惑になっちゃうの。そうこうしていると。

「その君、どうしたんだい？」

「ふえ？」

俺が話しかけると彼女は茫然と見てきた。

「何か困っている事があるのなら相談にのるよ？」

俺が優しく話かけると話してくれた。

どうやら父親が重症で入院していて母親は喫茶店をやるのに大変で姉はその手伝いで大変で兄は怖い顔をしながらずっと素振りをしているらしい。

「それは大変だね、なら君のお母さんに寂しい事を話すんだ。」

「え？けどそれじゃ迷惑になるの……………」

「いやそんなことないよ、親っていうのは子供には甘えてほしいものなんだ。」

「そうなの？」

「そうだ、だから遠慮なく甘えるといい、そうすれば願いは叶うから。」

俺はそれだけ言って帰った。

そのあと無事家族の仲は取り戻したらしい。

その日の夜、俺は病院にいる、理由は高町なのはの父親、高町士郎が眠る部屋に
いる、その理由は高町士郎を回復させるためだ。

俺はキープレードを出して。

「ケアル。」

俺が回復魔法を使うとみるみる回復していく、それである程度回復させると。

「ううくん。」

「やべ、目覚めそう。」

目覚めそうになったので俺は即座に転移した。

どうも高町桃子です、
私は今店を閉めてなのはと寝室でなのはと寝ています。

どうやらなのはには寂しい思いをさせちゃっていたみたいで悲しかった、けどもうそんな思いはさせまいとしています。

それで電気を消して寝ようとしたけど電話が掛かってきて出るとどうやら土郎さんが目覚めたそうなので家族総出で病院に向かいました。

病院に着くと土郎さんは上半身起き上がっていて私達を迎えてくれました。

医者もこれは奇跡だと言っていました、だって危篤だったのに今では殆どの傷が失くなっていたのだから。

でも今の私達には関係無い、だって土郎さんが目覚めたんだから。

高町士郎が回復させてから数年、俺は地下訓練所で色々修行しており今ではドラゴンスレイヤーの方も使いこなしてるし神代魔法の方も使いこなしてその作品に出てきたアーティファクトを幾つか作り出した。

それと俺は万屋LEONをやっている、主な仕事内容は何でも屋である、けどそれは他の次元世界でも適用する、なので次元犯罪者を捕まえたりしているので管理局の繋がりもあつたりする。

そして今日は何もなくて海鳴市を放浪しているのだ。

それで暫くすると金髪の女の子に紫色の髪の子が歩いている、そしてそれを黒い車が近付き二人を誘拐した。

俺はそれを見てすぐさま裏路地に入り俺は魔具のキャバリエールを取り出してそれに跨がり車を追った。

暫く追っていると奴等は海沿いの倉庫についたので俺はバイクから降りて倉庫の様子を見る、すると入り口には見張りが二人いてドラゴンスレイヤーの音を聞こえやすく

するのを使い中には8人の誘拐犯がおり二人の少女は奥で縛られている。

「十人か、大したことはないな、これならこれだけで十分だな。」

俺は空間魔法の宝物庫から閻魔刀と顔を隠す仮面を取り出して真っ正面から乗り込んだ。

「おい、お前は何者だ？」

「お前らがさらった少女を助けに来たものだ。」

「そうか、なら死ねや!!」

男二人はマシンガンを撃ってきたが俺はそれを全て閻魔刀で全ての銃弾を斬り裂いた。

「何で死なねえんだよ!!!」

「この程度か……………」

俺は高速で近付き二人を峰打ちして気絶させた。

そして俺は二人を縄で縛り中に入ると8人の内6人がおり俺にマシンガンを発砲するが俺はそれを全て閻魔刀で斬りながら近付き6人を気絶させた。

そして俺は奥に進むと二人の男と二人の少女がいた。

「貴様何者だ!!!部下はどうした!!!」

「お前の部下なら気絶させて縛ってるよ。」

「くそ!!!あの役立たずどもが!!!」

「それでどうする?おとなしく少女達を解放するなら見逃してやらんでもないぞ?」

俺がそういうと先程から黙っていた男が殴ってきたので俺は素手で受け止めると男は驚愕しているのでその隙に俺は鳩尾を殴って気絶させた。

しかしやられたというのに主犯は気持ち悪い笑顔で見てる。

「金髪の小娘はいいが紫色の髪の毛のやつは助ける価値なんてねえ、なにせこいつは……。」

「やめて!!!言わないで!!!」

紫色の髪の毛の少女が叫ぶが。

「何せそいつは吸血鬼という化け物なんだからな!!!」

ほう?吸血鬼か……悪魔とはまた別の存在だろうな。

「え?嘘よね?すずか……。」

金髪の少女は問いかけるが泣きながら俯いている。

どうやら肯定みたいだな。

「どうだ?怖いだろう?こんな化け物いたら迷惑だろう?」

「……………によ。」

「あ?」

「すずかは化け物じゃないわ!!!すずかはすずかよ!!!私の親友よ!!!」

「アリサちゃん……………」

「け!!何が親友だ、それでお前は?どうなんだ?」

「俺か……………」

二人は俺の言葉に顔を青ざめる、そして主犯はニヤニヤしてくる。

「この子が化け物とは思わないな、俺はこの子以上の化け物を知っているからな、それに比べたら可愛い位だぞ。」

そして俺は主犯に近付き気絶させて二人を縛っていた縄をほどいた。

「これで君達は無事だ、家族に連絡をとるといい。」

俺が二人を縛りながらいう。

「あ、はい、分かりました。」

そして二人は連絡をしてその数分後、三人の女子と見覚えがある二人の男性が入ってきた。

「!!貴様何者だ!!」

「俺は二人を助けたものだ。」

「あ、そうなのか、すみません助かりました。」

「気にしなくていい。」

それから二人は俺の閻魔刀を見てくる、どうやら俺が只者ではないと分かったらし

い。

それで話していると拐われた少女と似ている女子が近づいてきた。

「すいません、お礼がしたいので屋敷に来て頂きますか？」

言われたが断れそうにないので、了承した。

そして俺はバイクで来たのでバイクで着いていった。

暫く着いていくとデカイ屋敷について客間に案内された。

「まずは自己紹介ね、私は月村忍、それで妹のすずかよ、それとメイドのフェアリンとノエルよ。」

「次に僕は高町士郎で息子の恭也だ。」

「それで私はアリサ・バニングスです。」

「俺は……レオンだ。」

「そう、レオンさん、妹とその友達を助けてくれてありがとうございます。」

「気にするな、偶々見つけたから助けただけだ、それよりも本題を話したらどうだい？」
「そうですね、それではまずはあなた方は私達の秘密を知りました、なのであなた方には2つの選択肢があります。」

「まず一つ目は私達の記憶を消すか二つ目は私達の眷族となり死ぬまで話さないか、どちらか選んでもらいます。」

「ほう？どうやら記憶を消して無かったことにするか眷族になって秘密を隠し続けるかかってことか。」

「私はすずかの事を忘れてたくありません。」

「アリサちゃん。」

バニングスは秘密を隠し続けるのを選んだか。

「それでレオンさんは？」

「もしも眷族を選んだら正体を明かさないといけないのか？」

「え？ええ、そうね。」

「そうか、ならちなみに記憶を消す方法とは？」

「それは私が催眠術を使って消すのよ。」

「……………はあ、そうか、なら俺の選択肢は一つしか無いじゃないか。」

「え？それはどういう事よ。」

「何せ俺にはその催眠とかは全く効かないんだ。」

何せ前世からあるこの魔眼のせいでそういう催眠術とか幻術とかは全く効かないからな。

「え!?!それは本当なの!?!」

「本当だ、試しにやってみるといい。」

「分かったわ『その仮面を外しなさい』。」

「断る。」

「!?!本当に効かないわね。」

「だが困ったな、俺は出来るなら素性を隠したいのだが、名前も仕事での名前だし………ここは一つ取引をしないか？」

「何かしら？」

「これから俺が一つ秘密を明かす、それにより眷族としてもらえないか？」

「それは………分かりました、それでいいです。」

「まあ、損はさせませんよ、それで俺の秘密は………」

俺はただの人間ではない、魔導士だ。」

俺は魔力弾を幾つか作り見せた。

すると周りの皆は驚愕している。

「これは俺達魔導士がよく使う魔力弾だ。」

俺は出した魔力弾を焔、雷、氷、水、風、土と変えていく。

「これでいいかな？」

「え、ええ分かったわ。」

皆驚いていてビックリした顔をしている。

「これ以外にも秘密はあるのだがその内の一つがこれだから秘密にしないといけない理由だ。」

「分かったわ、それでいいわよ。」

「どうやら納得してくれたので俺は懐から俺の仕事用の携帯番号を書いたメモを渡した。」

「ここには俺の仕事用の携帯番号を書いておきました、俺の普段の仕事が万屋をやっているから仕事なら報酬次第でどんな仕事でも受け持つてやる。」

「ありがとう。有効的に使わせてもらおうわ。」

「それでは俺はこれにて「少し待つてくれないか？」どうしました土郎さん。」

俺が帰ろうとすると高町土郎が止めてきた。

「どうやら君は剣に腕がありそうだからね、出来れば模擬戦をしてほしくてね、構わないかな?」

「どうやら戦いたくてウズウズしているみたいなので俺は。」

「……………はあ、いいですよ、その代わりやるのは明日の昼でどこか人目が見つからない場所にさせてもらいますよ。」

「それだったら僕の道場なら人目もつかないから問題ないよ。」

「分かった、それなら明日昼11時30分に向かわせてもらいます、それでは。」
そして俺は空間魔法を使い即座に家に帰った。